

研究発表要旨

アキレウスはヘーローズと呼ばれているか——『イリアス』における ἥρωος
佐野 馨

一般に英雄と訳されることの多い ἥρωος は、生まれにより神性を帯びたあるいは死後神格化した存在を表すこともある。しかし『イリアス』や『オデュッセイア』においては、この意味で用いられている例は、もしあるとしても、ごく僅かである。

『イリアス』でこの語がどのように用いられているかを実際に分析すると、この語は作中の登場人物の非常に多くに適用されているが、その中であってアキレウス個人を指して用いられることは非常に少ない。そればかりか一度も用いられていなかったという可能性すらある。本発表はこのことを検証する。

両叙事詩において ἥρωος の語が非常に曖昧かつ広範に、戦士や男程度の意味で用いられている場合が多いことは周知の事実である。実際に数えてみると、『イリアス』中で用いられている 74 回中の 26 回、即ち約三分の一は複数形をとり、アカイア人や戦場にいる者たちのような不特定多数の人物を一括りで表したものである。一方、ἥρωος が個人を指す場合には、アガ멤ノンやパトロクロスのような優れた戦士を表す例も少なくないが、ほとんど活躍しない人物や命乞いをする人物が ἥρωος と呼ばれている場合もある。同様の傾向は『オデュッセイア』にも見られ、特に個人に関しては『イリアス』よりもさらに対象が広がっており、盲目の詩人や戦場に出た経験のないテレマコスなどにも適用されている。

このように『イリアス』においては、登場する男達の多くが ἥρωος に含まれ、それゆえ戦士でさえあれば誰もが ἥρωος と呼ばれる可能性がある。それに対してこの物語の中心的人物であり、描写される機会も多いにもかかわらず、アキレウス個人が ἥρωος と表されている回数は非常に少なく、そう表されている可能性があるのは第 23 巻の 824 行と 896 行の二箇所のみである。しかしこれらの二箇所にはそれぞれ問題がある。前者はアイアスとディオメデスの槍競技が決着し、アキレウスがディオメデスに賞品の剣を与える場面である。そもそもこの箇所は展開が非常に奇妙であり真作か疑わしいという指摘がアレクサンドリア時代からなされているが、ἥρωος の語の使われ方もまた不可解である。即ち、この行の直前まで二人の決闘の様子が描かれ、その間アキレウスに関する描写はされていないにもかかわらず、あたかも直前の文の登場人物を受ける代名詞の如くにこの語が用いられているのである。一方 896 行は αὐτὰρ ὁ γ' ἥρωος という頻出する定型句を用いた一行であるが、ここでもやはり ἥρωος は代名詞の如く用いられており、これをアキレウスと取る解釈 (Leaf&Bayfield 等) とアガ멤ノンと取る解釈 (Willcock 等) がある。しかし、23 巻の葬礼競技の描写等をもとに精査すると後者のほうが正しいように思われる。

以上のような問題を踏まえて『イリアス』における ἥρωος を見ていくと、アキレウスが個人としては作中一度もヘーローズと呼ばれていない可能性が見えてくるのである。

『メタフシカ』M 卷 4-5 章におけるアイデアの再論

西岡 千尋

アイデア論・数論の長大な批判を試みるにあたって、アリストテレスは『メタフシカ』M 卷の冒頭で三段階のプログラムを掲げる。このうち第二プログラムが「アイデアそのものについて別個に、端的にかつ習慣に従う限りに」（M1, 1076a27-8）検討する M4-5 に当たる。両章の大半が A 卷 9 章前半部分との並行記事から成るという構成上の問題は、19C より『メタフシカ』各巻の成立をめぐる波紋を投げかけた。

先行性について Trendelenburg (1826)以来主流であった M4-5 の早期説に対し、「重複（Dublette）を如何に明らかにするか」という問いに集中した Jaeger (1912, pp. 28-37)は A 卷先行の文脈的根拠、およびこれを支持する動詞人称の異同を提起した。以後、論争は Annas (1976)に至るまで、Jaeger の発展史的解釈への修正や距離の取り方に収束してゆくことになる。一連の議論が長年に亘り資料的関心から問われてきたため、Jaeger による人称問題が際立ち、M 卷の文脈に即した論点が分散したことは致し方ない。しかし、Patzig のプログラム解釈と Burnyeat の "Prelude"（共に 87 年）を経てこの古典的問題を再び俎上に載せること、とりわけ、上記の構成をもつ M4-5 が M 卷の一プログラムとして成立してしまう、その核心的機縁は何処にあるのかを問うことには意味がある。そこで本発表は、①M4 冒頭の哲学史、並行記事、および M4 末の独自記事を通して見た際、4-5 章が A 卷とはどのように異なる仕方でアイデア論を提示しているのか、また②これがあくまで M 卷のプログラムの一部として機能するという観点から、M4-5 のアイデアにどのような哲学的特徴が浮かび上がるかを検討したい。

① (a) 哲学史の差異 (M4/A6)、(b) 並行記事導入の差異 (M4/A8-9)、(c) 並行箇所範囲と異同 (M4-5/A9)、(d) M4 挿入記事 (1079b3-11) の四点に着目し、各々の部分において A 卷の「存在するものの原理としてのアイデア」の説明から M 卷の「離された普遍としてのアイデア」の描出への一貫した移行が見出されることを確認する。並行記事に関しては Primavesi (2012)による最新の校訂が利用可能である。

②にもかかわらず、両巻においてそれぞれ異なった仕方で現れるアイデアは、気まぐれな視点の浮動とは言い難いにせよ、実際に何か別のものを指しているわけではない。M4-5 を第一プログラム (M2-3) と対置する際に見えるのは、変化が起きているのはむしろ、提示されたアイデアが数学的対象と如何なる関係・連続性にあるか、という点である。それは微妙で静かな差異であるが、単に M 卷の主題や執筆時のアリストテレスの立場に沿う変更を蒙っているという以上に、アイデア論批判のプログラムの一角として成立するに足る意義をもっていると思われる。この観察は Jaeger が向き合った「重複の問い」への M 卷の読解からの応答となりうる。他方、「離在」という論点が学際的な癒着をはらんだアイデア論の問題に接し、哲学的対象ないし本質と数学的対象を（再）分節化する働きを担うことになるという点も示唆的である。

マーニールウス『アストロノミカ』における百科全書主義

竹下 哲文

アウグストゥス及びティベリウスの時代を生きた詩人マルクス・マーニールウスの『アストロノミカ』は、その当時大きな関心を集めていた占星術を題材とする教訓叙事詩である。比較的近年では、本文批判や天文学史・占星術史的な研究だけでなく、この詩が文学作品としてどのように位置づけられるのかという点に着目した研究も盛んに行われている。そうした中で、この作品が単一の典拠によるのではなく複数の思想潮流を摂取した、いわば折衷的な性格を持つものであることが明らかになってきた。『アストロノミカ』の中には、その表題がうかがわせるとおり、黄道十二星座をはじめ様々な星々や天文現象が歌われているが、一方でまた、地上世界や人間の気質・職業の細かな描写も行われている。そしてその結果、『アストロノミカ』は、天の事象だけでなく地上の事物も含めた宇宙全体にわたる様々な事柄を幅広く包括的に描き出す作品となっている。『アストロノミカ』中の少なからぬ部分を占めるこうした地上世界描写に「写実主義、リアリズム」の要素を見出し、それが天の星々に関する記述との間に重要なコントラストを作りなしているという指摘はこれまでも行われているが、この点については、異なる視点から『アストロノミカ』の思想的背景を検討する余地がなお残されているように思われる。

より広い研究の文脈に目を向けると、比較的最近では「百科全書主義 encyclopaedism」と称される思想的潮流に関して、その対象範囲を近代以降に限らず中世・ルネサンス期や古代にまで拡張して研究が行われている。その際古代における事例のひとつとして挙げられるのがローマ帝政期である。ローマにおける百科全書主義研究では、共和政の終わりから帝政期にかけての文化的・社会的変動——とりわけ知識と世界の拡大、混乱した秩序の再編——の連続性が重要視されている。そして他ならぬそうした時代の転換点であるアウグストゥス帝の治世下に書かれた『アストロノミカ』は、このような文脈においても研究の対象となりうるものである。そこで本発表は、『アストロノミカ』中に百科全書主義的要素がどのように現れているかの検討を通して、この作品がそうした思想の流れを汲んでいること、また詩と宇宙との間に秩序ある統一体としての共通性・類比関係を認めるマーニールウスの、天も地上も含めた世界の全てを詩の中に綴ろうとする企てが、皇帝とローマの権威を讃える「記念碑」としての側面をも持つものであることを明らかにする。

前4世紀ギリシアの中立政策

——前362/1年の和平碑文(IG IV 556)の再考とイソクラテスを中心に——

柳谷美智子

前362/1年の和平碑文(IG IV 556)は現存する古典期碑文の中で *koine eirene*(普遍平和)の文言が最初に確認された貴重な例である。ゆえに、前362/1年の和平の解明を試みるうえで不可欠な碑文であり、その文面からは全ギリシアの平和主義を読み取ることができる。この時代から、国際秩序の変動が徐々にみられるようになってくるが、その最たる例の一つが、ペルシア帝国の衰退に伴う総督のペルシア大王への反乱であろう。本碑文の背景として、前362年、大王に反旗を翻した総督がギリシアに反乱に加担してくれるように要請したことにある。しかし、ギリシアは一致団結してこの要請を断り、中立の立場を表明する。この決議から、本碑文はペルシア大王主導のもとに締結された嘗ての *koine eirene* とは異なり、ペルシア大王が全く干渉しない、スパルタを除く全ギリシア人主導のもとに初めて締結された *koine eirene*(普遍平和)であると考えられている。その意味において、この碑文は前4世紀のギリシアの国際関係を考察するうえで、第二次アテナイ海上同盟碑文にも劣らないほどの重要な碑文と思われるが、これまでほとんど研究対象とされてこなかった。本発表では、新たな視点から主に次の二点を中心に議論を進めてゆきたい。1. 本碑文は18世紀にアルゴスで発見されたにもかかわらず、なぜテキストがアッティカ・イオニア方言で記されているのかという疑問。2. 興味深いことに、本碑文テキストで使用されているのとほぼ同じ表現・文言が、国際関係用語を中心に弁論家イソクラテスのテキストの中に散見されるが、これは単なる偶然なのかそれとも草案の段階で、イソクラテス自身のなんらかの関与があったのかどうかという問題。イソクラテスは弁論学校主宰者としての教育者の顔と国際問題を論じる評論家としての二つの顔を持ち合わせていた。政治活動からは身を引いたと公言しつつも、実際は裏方として、当時のアテナイの外交政策を始めとして国際関係の諸問題の相談役であり協力者であった。前380年代の大作『民族祭典演説』中にみられるように、前386年の「大王の和約」を契機に *koine eirene* 問題と並行して、*autonomia* 問題にも真剣に取り組み始める。それは単にギリシア諸ポリスの *autonomia* 問題だけでなく、ペルシア王主導の *koine eirene* による国際秩序からの脱却を模索するものでもあった。ギリシアの中立問題はある意味、ギリシアの *autonomia* 問題にも通じる。本発表では、この点も考慮に入れて、前4世紀ギリシアの中立政策を謳った前362/1年の和平碑文の再評価とイソクラテスの政治思想の影響を論じることによって、前362/1年当時の国際関係の再構築を目指したい。

『オイディプス王』第二スタシモン

平野 智晴

『オイディプス王』第二スタシモン (2nd St.) を前後のエペイソディオオン (Eps.) と関連付けてどのように解釈するかという問題については、現時点においても明確な解決に至ったとは言い難い。本報告は、本オードの当該場面展開における意味・機能を確認し、この問題を再検討するものである。

2nd Eps. で、イオカステ (I.) は、オイディプス (O.) とクレオンとの諍いを仲裁し、O. に神託を否定すべき理由と経緯を話す (707-25)。しかし、却って恐れに駆られた O. は三叉路での殺人を告白する (771-833)。彼は当時の目撃者たる羊飼いに証言をさせて、テイレシアスが予言する先王 (L.) 殺害の咎から逃れんとする (836-62)。コロスにとっては、未知の L. 殺害者が王位を狙っているかも知れぬ中 (139-40)、あらぬ噂が人の心を蝕み (681)、当否不明なまま神託や予言が否定されようとし、しかし O. による L. 殺害の疑いも拭えぬ (834-5) 状況である。このゆえに、彼らは神の支配の貫徹を願って歌い始める。

2nd St. において、コロスは 873 ὕβρις φυτεῦει τύραννον という。未知の L. 殺害者が O. の王位を狙っていることを、あるいは I. の説得を受けて O. が神託や予言を否定しようとしていることを、あるいは O. が L. 殺害者たることが暴露されることを恐れている。彼らは 879-80 τὸ καλῶς δ' ἔχον | πόλει πάλαισμα という。L. の横死の噂、O. の殺人告白が影を落とす中 (cf. 807ff.)、未知の ὕβρις の転落を希求している。この ὕβρις に付き纏う不安は 883-6, 889-91 の描写にも現れている。彼らは 895-6 εἰ γὰρ αἱ τοιαῖδε πράξεις τίμιαι, | τί δεῖ με χορεύειν という。神への不信を表明しつつ、逆説的に神の介入をも懇願している。そして、彼らは 906-8 φθίνοντα γὰρ ... Λαΐου | θεόσφατ' ἐξαιρουῦσιν ἤδη という。不特定の三人称複数であるが O. と I. とも取れ、ここにもコロスの不安や恐れが窺われる。

3rd Eps. で、I. が登場しアポロンの祭壇で祈りを捧げる (911-23)。すると、コリントスからの使者が登場し O. の実父とされるポリュボスの死を伝える (924-44)。I. は神託の失敗を確信し、彼を呼び出し共に喜ぶ (945-83)。この二人の姿は、2nd Eps.、2nd St. でのコロスの不安や恐れと呼応する (cf. 834-5, 906-10)。

ところで、真相を知る観衆にとって、この展開は違ったものに映るであろう。すなわち、2nd Eps. において L. は神託を恐れ生まれた子を遺棄させたが結局その子に殺されることに、O. も神託を恐れ故郷を去るがそれが実父を殺すことに帰結する。2nd St. においてこれらは神によるものとされ、O. は知らずして L. 殺害者と非難されその破滅が願われる。3rd Eps. での O. と I. の喜びは恐怖の裏返しであろうがそれは虚しい。

よって、当該の場面展開は、神の支配の貫徹を願う者と逃れんとする者の思惑の交錯に寧ろ神意の現れを示し、その後の破滅を準備するものと考えられる。

ローマ帝国統治下リュキアにおける善行と都市 ——大善行者オプラモアスの恵与を中心に——

増永 理考

ローマ帝国統治下の属州都市の維持、発展に関する公的な事業（建築物の造営や食料供給など）に際しては、しばしば富裕な都市有力者が私費を拠出する慣行、いわゆるエヴェルジェティズムが大きな役割を果たしていた。中でも、ローマ支配以前から都市社会の基盤があったギリシア世界、特に小アジアは、上記の慣行が顕著に窺える地域の一つであった。この慣行をめぐっては、従来、専ら費用を拠出する有力者の視点からその社会的、政治的意義が論じられてきたが、近年、恵与による有力者の影響力を相対化する見解が示され、実際、これまで報告者自身も、主に小アジア西部に位置する属州アジアの都市を例に、受益者である都市共同体にとっての恵与行為の意義を考察してきた。

しかし、都市共同体にとっての恵与をめぐっては、アジアと同様、都市化が進展していた小アジア南西部のリュキア地方を見逃すことはできない。このリュキアでは、他の地域に比して、都市の連合組織であるコイノンの活動が際立つ一方で、紀元2世紀半ばには、そのコイノンを基盤として、オプラモアスなる大善行者が、自らの出身都市を超えて地域的に恵与を行ったことが知られるため、公的な恵与に関してアジアとは異なる側面を析出することができると考えられるからである。しかしながら、先行研究では、このオプラモアス関連の長大な碑文史料は、彼自身やコイノン、または彼の恵与に介入したローマ皇帝や総督らの活動実態を探るべく検討されるばかりで、一連の碑文に最新の校訂、解説を加えた Ch. Kokkinia の研究をはじめとして、各都市の動向についてはほとんど触れられていない。ところが、実際に個別の都市によるオプラモアスに対する顕彰などが存在する以上、都市の動向を無視して彼の善行を考察することはできないのである。したがって本報告では、主にオプラモアスによる恵与をめぐって、リュキアの都市のいかなる利害関係が交錯していたかを解明することを試みる。

具体的には、まずストラボンなどの史料をもとに、リュキアにおける都市とコイノンの関係を概観し、コイノンに基づく地域的共同性の裏に諸都市の非対称な関係が存在したことを確認する。その上で、オプラモアスに関する碑文史料から、彼の善行をめぐっていかなる都市がどのように関与していたのかを実際に検討する。史料を全体的に俯瞰するならば、とりわけリュキアの一主要都市ミュラは彼の善行に対して独自の態度を示していたことが明らかとなる。次に、このようなミュラの振る舞いの背景として、2世紀における同市の状況を考察し、最終的に、オプラモアスの恵与において、地域的貢献と自らの利益追求とのほざまにある都市の姿を提示する。

ポセイディッポス『エピグラム集』の Lithika における
ホメーロスの利用とオリジナリティ

千葉慎太郎

本発表で扱うのは、ペラ出身でおよそ前3世紀頃のヘレニズム時代の詩人ポセイディッポスの作とされるパピルス (P.Mil.Vogl.VIII 309) の形で近年発見された『エピグラム集』である。その中から特にホメーロスとの関係に着目しながら、それとの比較によりポセイディッポスのオリジナリティの所在を検討する。

ポセイディッポスのエピグラムは『ギリシア詞華集』にも収録されており、その他の出典 (別のパピルスやアテーナイオスなど) からも知られている。一方で今回扱う『エピグラム集』はポセイディッポス単独によるものと考えられており、収録エピグラム数もかなり多い。その内容はセクションごとに、石に関する詩、鳥占いに関する詩、奉獻詩、碑銘詩、競走馬に関する詩、難破船に関する詩、治癒詩等がある (一方で恋愛詩は見られない) が、今回は Lithika (1AB-20AB) という石や岩に関する詩が集められた箇所を中心に取り上げる。というのも、15AB の 1-3 行目 (οὐ ποταμὸς κελάδων ἐπὶ χεῖλεσιν, ἀλλὰ δράκοντος/εἶχέ ποτ' εὐπώγων τόνδε λίθον κεφαλῆ/πυκνά φαληριόωντα· τὸ δὲ γλυφὲν ἄρμα κατ' αὐτ' οὐ それは岸辺で響き渡る川ではなく、/ 髭を生やした蛇の頭が、かつてこの白縞が密に入った石をもっていた。そこには馬車 (の模様) が彫られており...) は *Il.18.576* πὰρ ποταμὸν κελάδοντα、*Il.13.799* κυρτὰ φαληριόωντα, πρὸ μὲν τ' ἄλλ', αὐτὰρ ἐπ' ἄλλα. を想起させるという指摘 (E.Sistakou)、ポセイディッポスのスコリアの伝承に関する知見の可能性への言及 (Sistakou, Σ D ad *Il.13.799* ἄλλα πρὸ ἄλλων, τουτέστιν, ἐπάλληλα, πυκνά) が学者によりなされている。さらに重要なのが Σ D ad *Il.13.799* φαληριόωντα : λευκανίζοντα である。ツェツェースがテキストを πυκνά ではなく、λευκά としているのはこの注を導入したためだという。つまり、ポセイディッポスは冒頭の数行で読みの難しいホメーロスでは hapax の単語を間接的に説明して、泡立つ波から石に転用しているという説明である。

また 19AB においてはポリュペーモスの名を出し、『オデュッセイア』9 巻の内容を取り上げながら、ポセイドーンへの讃歌のような構成になっている。すでに D.Petrain に指摘されているように βαρὺ κῦμα というのは変わった語の組み合わせではあるが、ホメーロスにおいては μέγα κῦμα (*Il.15.381*, *17.264*, *Od.3.296*, *5.416*, *12.60* etc.) という組み合わせと βαρεια χεῖρ (*Il.1.89*, *1.219*, *5.81*, *Od.18.56* etc.) という組み合わせは見られる。以上の点に加えて他の単語でもホメーロスに似た語彙を利用しつつ、ポセイディッポスは微妙に変更を加えているのではないかということも発表者は指摘する。

ポセイディッポスは上記のように巧みにホメーロスの用語を引用しつつも、エピグラムの内容自体はあくまで Lithika というテーマに沿った石かあるいは岩に関する作品として詩を完成させている。自らのホメーロスへの深い知識を披露しつつも作品としては石に関するエピグラムであり、同じ用語を用いても全く性質の違う種類の作品を書いているという彼のオリジナリティについて指摘する。

アナクシラス問題再考

——前古典期ギリシアのオリュンピア期と暦年代をめぐって——

周藤 芳幸

メッセニア戦争についてもっとも詳細な情報を提供するパウサニアスによれば、ヘイラの陥落で第2次メッセニア戦争が終結したのは、第28オリュンピア期の第1年のことであり (Paus. 4.23.4)、これは一般に用いられているオリュンピア期の編年では、前668年にあたる。さらにパウサニアスは、その後メッセニア人がレギオンの僭主アナクシラスの呼びかけに応じてシチリアに渡り、ザンクレを奪ってメッセネと改名したことに触れ、それが第29オリュンピア期 (前664～前661年) のことであったと明記している (Paus. 4.23.10)。これが、一般にメッセニア戦争を前8世紀から前7世紀にかけての出来事とする中心的な根拠である。ところが、ヘロドトスは、イオニア反乱直後の状況について述べるにあたって、祖国を離れたサモス人がレギオンの僭主アナクシレオス (*sic*) に指嗾されてザンクレを占領したという逸話を伝えている (Hdt. 6.22-23)。またトゥキュディデスも、ザンクレを支配していたサモス人をレギオンの僭主アナクシラスが追い出し、自らの先祖の国名にちなんでメッセネと改称したと述べている (Thuc. 6.4.6)。さらにディオドロスも、第76オリュンピア期の1年目 (前476年) のこととして、レギオンとザンクレの僭主を兼任していたアナクシラスが18年間の治世の後に世を去ったと述べている (Diod. 11.48.2)。ヘロドトス以下の歴史家の叙述が正しいのであれば、明らかにアナクシラスはパウサニアスから想定されるような前7世紀中頃の人物ではなく、前6世紀末から前5世紀初頭の人物ということになる。実際、パウサニアスも、上述の箇所の続きで、スパルタ人に隷属していたメッセニア人がスパルタの震災に乗じて蜂起した有名な事件 (前464年) に言及する際に、その年代を第29オリュンピア期としている (Paus. 4.24.5)。現行の刊本はすべて、このオリュンピア期を写本の「29」から「79」に修正した読みを採用しているが、これによって、この事件の年代と他の史料のそれとの整合性が保たれる一方で、パウサニアスのテキスト上では、この直前まで記述されていた出来事との間に、不自然に長い断絶が生じてしまう。しかし、近年の研究では、第2次メッセニア戦争の年代をペルシア戦争に近づけることによりこのような問題が解消されるだけでなく、いくつかの関連する史料の理解が容易になることが示唆されている。プルタルコス「年代を正確に決定することは、オリュンピア競技優勝者の表から推論する場合に特に困難である」という有名な言葉を残しているが (Plut. Num. 1.4)、オリュンピア期による年代観の整理に起因する問題は、メッセニア戦争の場合にとりわけ深刻であると言わざるを得ない。そこで本報告では、メッセニア戦争に関するパウサニアスの記述をめぐる問題を出発点として、オリュンピア期という編年方法がもたらすことになった混乱の諸相を明らかにすることで、前古典期のギリシア史の再構成に向けた展望を提示したい。